

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」継承
～地域内・地域間連携事業

事業者名：釧路市立博物館

住所：085-0822 北海道釧路市春湖台1-7

TEL：0154-41-5809

FAX：0154-42-6000

HPアドレス：<http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/>

連携事業者名：太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部・釧路市総務
部地域史料室・歌志内市郷土館ゆめつむぎ・
田川市石炭・歴史博物館

会場：釧路市立博物館 1階マンモスホール

事業期間：平成21年7月29日 ～ 平成22年1月22日



1. 館の使命と本事業の関係

当館の使命は、釧路地域及び周辺地域の自然や歴史に関わる調査・研究を通して、地域の特性を明らかにし、地域に住む人々に活用可能な情報を発信していくことである。

石炭・鉱物・森林・水産などの「資源」は、開拓地であったこの地域の成り立ち、将来を考えるにあたって重要な要素である。まちづくりは、地域史に学ぶことが不可欠である。石炭について、当市は北海道最初の石炭採掘地であり、現在もわが国唯一の炭鉱がある。製紙・水産とともに「三大基幹産業」として、多くの人々が携わり、有形無形の歴史がつくられてきた。博物館では石炭産業にかかわる各種事業をこれまでも行ってきたが、本事業では博物館がこれまで以上に情報集積・発信の場となるべく、市民協働での活動を行い、その使命をさらに果たすべく展開する。

2. 企画内容

①事業目的

本事業において、太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部(OB会)と市地域史料室(アーカイブ)、そして博物館が核となり、釧路での「炭鉱文化」にかかわる情報を集中的に収集し、相互連携での資料管理と公開、活用を行なっていくための基盤整備を目的とする。これまで交流企画展や学芸員による自主的な共同研究により、「同じ石炭の記憶を持つ」地域との交流を行ってきたが、深化させていくためには、さらに博物館等を中心に、関係する各地域社会の優れた点や問題点を学びあうことが重要である。

②事業概要

市地域史料室「太平洋炭鉱資料室」所蔵の写真を整理し、博物館での特別展「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」の開催と、図録(写真集)の制作を中心に、関連して、地域内・地域間連携を模索する炭鉱フォーラム、バス見学会、映画上映会を実施した。

また期間前には、炭鉱文化の継承先進地である福岡県筑豊地域(田川市石炭・歴史博物館等)を訪問し、その調査と地域間の博物館連携について意見交換を行った。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

特別展「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」

会 期：平成 21 年 11 月 7 日(土)～12 月 13 日(日)

会 場：釧路市立博物館 1 階マンモスホール

博物館・OB 会・地域史料室で構成する「展示等検討会」と「編集委員会」にて、「しごと」「くらし」の各テーマに沿って、非常に多くの時間をかけ検討した。240 枚を選び、うち 120 枚を解説や思い出を記したパネルとともに掲出、また残り 120 枚とあわせてパソコンを使ったスライドショーで展示した。加えて、太平洋炭礦が制作し市が所蔵しているビデオ作品の上映、土・日曜は炭鉱 OB 会会員による展示解説を実施した。

バスツアー「炭鉱(ヤマ)のくらしをたずねて」

日 時：平成 21 年 11 月 8 日(日) 13 時～16 時 30 分

炭鉱 OB と当館担当学芸員が資料での検討と現地踏査を重ね、「歴史」「仕事」「くらし」をテーマにコースを設定した見学会を実施した。

フォーラム・講演会「炭鉱(ヤマ)のくらしが教えてくれるもの」

日 時：平成 21 年 11 月 15 日(日) 13 時～16 時 30 分

「九州・筑豊の炭鉱文化」：福本 寛（田川市石炭・歴史博物館学芸員）

「ヤマの記憶とマチづくり」：三戸満雄（歌志内市郷土館ゆめつむぎ支援組織「ゆめつむぎ通信員」会長）

炭鉱文化の継承とその課題、地域博物館と市民（グループ）のかかわりなどをテーマとし、講演後はパネルディスカッションを行なった。

炭鉱映画祭 in くしろ

日 時：平成 21 年 12 月 16 日(日) 13 時 30 分～16 時

市地域史料室・連携館等から借り入れた、炭鉱や炭鉱所在自治体の記録映画 5 本を上映した。



制作した図録



混み合う会場

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 2,135 人（期間中の入館者）

内 訳：バス見学会「炭鉱(ヤマ)のくらしをたずねて」 40 名（申込 72 名：抽選）

フォーラム「炭鉱(ヤマ)のくらしが教えてくれるもの」 60 名

映像を見る会「炭鉱映画祭 in くしろ」 238 名

図録(写真集)「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」 (A4版・62ページ)
広報用ポスター・チラシ

○新聞記事



- ・北海道新聞 21.08.12(夕刊)「釧路市立博物館 炭鉱の暮らし 多彩にたどる 11～12 月に展覧会やフォーラム 市民の資料も募集」
- ・釧路新聞 21.8.16「釧路炭田の資料募集 日々の暮らし振り返る 釧路市立博物館」
- ・朝日新聞(北海道版) 21.08.28「炭都の活気、いまに 往時の写真、提供呼びかけ 釧路で11 月から特別展」
- ・信濃毎日新聞 21.09.19(夕刊)「列島きた・みなみ＝北海道 炭鉱の暮らしを写真で紹介」
- ・釧路新聞 21.11.7「炭鉱の歴史 写真で 釧路市立博物館きょうから特別展」
- ・北海道新聞 21.11.11「炭鉱の歴史や生活文化たどろう 釧路市立博物館で特別展 来月13 日まで 写真や模型など120 点」
- ・釧路新聞 21.11.17「ヤマの記憶どう継承 炭鉱フォーラム 各地の事例聞く」
- ・北海道新聞 21.12.03「映像で振り返る 炭鉱の昭和史 6 日、初の映画祭 「太平洋」「雄別」も登場 市立博物館」
- ・釧路新聞 21.12.5「あす、炭鉱映画祭 釧路市立博物館」
- ・北海道新聞 21.12.07「ヤマの記憶 じっくりと 炭鉱映画祭に230 人」

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

当市は炭鉱が稼行中とはいえ、その記憶や資料は失われつつある。今回の取り組みで、これまで埋もれていた労働や生活に密着した市民一人一人の「記憶」にも大きな価値があることが認識されるようになった。地域の成り立ちと産業の関係を考えたいという要望が、多く寄せられるようになった。なにより、「炭鉱のことは博物館が情報を求めているらしい」「（炭鉱ばかりでなく）釧路のこんな情報があるけれど、博物館に知らせておこう」と、博物館が再び認識され、生活の中で埋もれていく貴重な資料と情報の集積地としての期待がでてきたことは、確実である。地域博物館再生への足がかりとなったといっても、過言ではない。

展示及び図録の制作によって、市が寄贈を受けた写真資料の整理と公開も一定進んだ。また成果として、今後への発展・深化への足がかりとなった。

石炭の歴史はこれまで、空知や九州を中心に語られてきたが、それらとの交流を行うことで、釧路炭田の地域性と普遍性を浮き彫りにすることができた。同時に、日本産炭史における釧路炭田の再評価が行われるようになり、研究者や市民の交流を活発にした。

課題として、地域内・地域間交流の拡大とともに、断片的に語られる市民の「記憶」をどのようにとりまとめるかがある。継続的な資料収集とともに、次年度以降「ヤマの話を聞く会」（語り部講座）を実施することで、記録したい。それは、世代間交流の活発化にも寄与する。

<釧路新聞「巷論」>（執筆：釧路新聞社 星 匠 氏）

釧路市立博物館で6日に開催された「炭鉱映画祭」には、200人以上が詰めかけた。会場は、立ち見どころか、入れない人たちもいた、石炭産業で働いてきたOBの人たちばかりでなく、若い人たちの会も見え、関心の高さを示した。映画祭の前には、炭鉱関連施設の見学会やフォーラムなども行ったが、いずれも人気が高かった。博物館では、今回の石炭関連ばかりでなく、自然や歴史、産業などの分野で、講演会や体験会、パネル展などさまざまな取り組みをしてきた。すっかり「マチの知恵袋」の一つとして定着してきた感がある。（以下略）

<OB会（太平洋炭鉱管理職釧路倶楽部）からの意見>

- ・今回、博物館で1ヶ月以上にわたり広く公開できたことに意義があったと思う。市民が一般的に炭鉱のこと、石炭のことを知らないということがあらためてわかった。今後、石炭の重要性をPRしていきたい。今回は非常にいい機会になったと思う。
- ・これまではOB会自らがやらなければならないと思っていた。今後は（博物館等と）知恵を出し合うことで、継続的に資料を公開しながら市民の参加を考えたい。

<市民から寄せられた感想>

今は炭鉱ブームというのでしょうか、過去の遺産として注目を集めていますが、石炭は過去のものではなく現在も採炭している釧路の果たすべき役割の大きさを感じています。そして釧路市立博物館で行われている様々な炭鉱関連の行事は、地域の人々が石炭の過去と今を知るまたとない機会となっており、重要な役割を果たしていると思います。このような博物館行事の人気は年々高まっており、人々の関心の高さを感じます。もともと自然が好きな私ですが、その関心も博物館を通じて炭鉱はもちろん、釧路のその他の産業や歴史、鉄道と釧路のマチの魅力の再発見へと広がっています。

これからも単なるブームや一時の人気に終わらず、炭鉱の記憶の継承や保存のため、また地域の魅力を再発見するきっかけの場として、今後の博物館に期待しています。（40代・女性）